

第43回アジア経済研究所発展途上国研究奨励賞の表彰について

「アジア経済研究所発展途上国研究奨励賞」は、アジア経済研究所が1980年度に創設し、発展途上国・地域に関する社会科学およびその関連分野における研究水準の向上に資することを目的とし、この領域における優れた調査研究の業績を表彰しています。

選考および表彰の対象は、発展途上国・新興国または地域について、社会科学あるいはその関連分野の観点から調査および分析した著作であり、かつ次の①あるいは②に該当するものです。個人研究、共同研究ともに対象としています。

① 2020年10月から2021年9月までに日本国内で公開された日本語または英語による図書、雑誌論文

② 2021年に海外で公開された英文図書のうち、執筆時、公刊時もしくは賞応募時点において日本国内に所在する大学・研究機関等に在職していた研究者（国籍は問わない）によるもの
2022年度は各方面から推薦された57点をまず所内研究者が審査し、選考委員による最終選考で下記の2作品が第43回受賞作に選ばれました。表彰式は7月1日にオンラインで行われました。

〈受賞作〉

『国家の「余白」——メコンデルタ 生き残りの社会史——』（京都大学学術出版会）

しもじょう ひさし
下條 尚志（神戸大学大学院国際文化学研究所准教授）

『緑の工業化——台湾経済の歴史的起源——』（名古屋大学出版会）

ほりうち よしたか
堀内 義隆（三重大学人文学部准教授）

〈選考委員〉

委員長：倉沢愛子（慶應義塾大学経済学部名誉教授）、委員：上田元（一橋大学大学院社会学研究科教授）、大塚啓二郎（アジア経済研究所上席主任調査研究員）、栗田禎子（千葉大学大学院人文科学研究科教授）、竹中千春（元・立教大学法学部教授）、深尾京司（アジア経済研究所所長）、藤田幸一（青山学院大学国際政治経済学部教授）

〈最終選考対象作品〉

最終選考の対象となった作品は受賞作のほか、次の1点でした。

『ベネズエラ——溶解する民主主義、破綻する経済——』（中央公論新社）

著者：坂口安紀（アジア経済研究所地域研究センター主任調査研究員）

●講 評●

下條尚志著『国家の「余白」——メコンデルタ 生き残りの社会史——』

くら さわ あい こ
倉 沢 愛 子

本書は、ベトナム南部メコンデルタのソクチャン省フータン社（村）で実施した調査を基礎に、複合的多民族社会において「国家の介入しにくい空間」を創造し、その中で生き残りをめざす人々の歴史を描いた研究である。植民地時代から脱植民地期、ベトナム戦争の時代を経て社会主義国家に編入される過程、さらにはドイモイ下の現在に至るまでの広大な歴史が、クメール人が多く住む小さな一つの村に焦点を当てて、彼らの語りを通じてリアルに論じられている。

「大きな歴史」ではなく「小さな歴史」にこだわるかに見えて、逆に本書を読む過程で「ベトナム戦争とは何だったのか」、「社会主義改造」やその後の展開（ドイモイ路線への展開）の意味、などの「大きな問い」に新しい角度から光が当てられており、「ローカルな秩序が歴史のなかで再帰的に紡ぎ出されていく」過程が見事に描き出されている。

一口にいえば村落調査研究に分類されるのであろうが、従来の社会経済史的視座に重点が置かれた研究にとらわれず、文化的、宗教的、言語的側面などからも多面的に紹介しているのが斬新である。すなわちベトナム経済史や政治史も十分に踏まえたうえで、文化人類学的な視点も取り入れて人々の日常の生活を彼らの言葉で語っており、その地域を全く知らない者が読んでも、ビジュアルにその姿が目に見えてくるようである。

人々の経験や言葉を物語り、意味づけていく筆致は、重厚かつ巧みである。たとえば厳し

い環境で生きてきた人々が生き残るすべの一つとして、上座仏教の世界への出家、還俗が頻繁に行われていること、また解放戦線側についたり、南ベトナム政府側についたり、時として巧みに立ち回る人々の賢明さなどもリアルに描かれている。

ただしここで取り上げられている地域では、あくまでローカルな秩序が生きており、フータン社は、メコンデルタ全体像を代表するものではなく、クメール色と上座仏教の影響が極めて強い、かなり特異な存在であると思われるので、その点に関する留保は必要である。またこれは生き残った者たちからの語りである点は、ある程度考慮して読み取る必要があるであろう。

著作の最初の部分でモラル・エコノミー論を紹介し、「生き残り」をその枠組みの中で論じようとしているが、これに関しては必ずしも納得のいく有機的な結合づけができていないようにも思われる。とはいえそれらは本書全体の価値を損なうものではない。

クメール語とベトナム語の双方を駆使し、広範な聞き取りにより膨大なデータを集めているが、オーラル・リサーチに偏ることなく、幅広い文献ともクロスチェックしながらきわめて実証的に記述している手法は大いに評価できる。帝国や国家が中心に置かれがちであった地域研究のあり方に、斬新な批判的視点と研究方法を投げかける優秀な力作といえるであろう。

（慶應義塾大学経済学部名誉教授）

●受賞のことば——^{しもじょう ひさし}下條 尚志

この度は、長い歴史を持つアジア経済研究所 発展途上国研究奨励賞を賜り、誠に光栄に存じます。選考委員会の先生方、本書を執筆するにあたり貴重な助言をして頂いた京都大学学術出版会の方々、これまで多様な形でご支援して頂いた先生方や関係者の皆様に、厚く御礼を申し上げます。

本書の舞台は、ベトナム南部メコンデルタです。なかでも、クメール人、華人、ベト人の民族的混淆が顕著に進んできたフータン社（行政村に相当）という地域社会において、長期の現地調査で得られた歴史語りと民族誌的資料に依拠し、議論を展開しました。この現地調査とともに、地誌や公文書、新聞なども活用し、20世紀以降のメコンデルタにおける人々の歴史経験と現在について検討しました。

植民地化と脱植民地化、その過程で生じた国際戦争、社会主義、市場経済化という歴史のうねりのなかで、生活の激変を迫られた人々は、どのように自身や家族らの生き残りを模索し、地域社会の秩序を再編してきたのか。この問いと向き合うなかで、ベトナム戦争期に仏教寺院が徴兵逃れの場となったり、社会主義改造下で闇市や非合法越境ルートが形成されたりするなど、国家の介入しにくい空間が、地域社会を取り巻く様々な場で、時代状況に応じて出現してゆく過程に着目しました。

20世紀後半、ベトナムやその周辺諸国は、戦争や社会主義に起因する動乱に巻き込まれました。動乱のなかで顕在化した民族・宗教、移民・難民をめぐる問題は、現在のグローバリゼーションや新自由主義、民族紛争といった諸問題と連続性があると、私は考えています。20世紀後半にベトナムに関わった諸国家は、戦争や社会主義という喫緊の問題に直面し、予測不能でとらえにくい人やモノ、情報の動きを何度も

制御しようとしてきました。そして21世紀以降、人やモノ、情報の動きは、世界各地でますます加速化するようになりましたが、Covid-19のパンデミック下で、一瞬にして国家によって制御されるという事態を私たちは目の当たりにしました。こうした歴史のサイクルをいかに理解すべきなのか。今後も民族誌的な「小さな歴史」にこだわりながら、ナショナル、グローバルな「大きな歴史」も視野に入れ、より長期的なスパンのなかで今起こっている諸現象をとらえていきたいと考えています。

様々なディシプリンを専門とする研究者の方々に本書の議論が伝わったことは、著者として心より嬉しく存じます。あらためて、このような貴重な賞を賜りましたこと、関係者の方々に深く御礼を申し上げます。

略歴

1984年 東京都生まれ。

2007年 慶應義塾大学経済学部卒業。

2015年 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科にて博士（地域研究）取得。

2021年 神戸大学大学院国際文化学研究科准教授、現在に至る。

主要著作

下條尚志、『戦争と難民——メコンデルタ多民族社会のオーラル・ヒストリー——（ブックレット《アジアを学ぼう》42）』風響社、2016年10月。

Shimojo, Hisashi, “Local Politics in the Migration between Vietnam and Cambodia: Mobility in a Multi-Ethnic Society in the Mekong Delta since 1975.” *Southeast Asian Studies* 10(1), pp. 89-118, April 2021.

堀内義隆著『緑の工業化——台湾経済の歴史的起源——』

おお つか けいじろう
大 塚 啓二郎

農村を起源に持つ工業化というテーマは、きわめて興味深い。コロナが過密な大都市を中心に蔓延したことを踏まえ、農村での工業化、雇用創出はきわめて重要な現代的な問題になっている。本書は、日本植民地下台湾の工業化について、従来あまり利用されてこなかった各種の資料を丹念に発掘・整理し、台湾の農村での工業化の実態を描き出した秀作である。台湾については農村工業化が工業化全体をリードしたことは漠然と知られていたが、社会分業の発達という観点から農村工業化を広い視野を持って捉えなおし、丁寧なデータ分析によりその実態を解明したことには高い評価が与えられて然るべきである。

特に、第4章（小農社会のなかの工業化：農村工業と労働供給）と第5章（民族工業と帝国経済圏：製帽業による世界市場への進出）は、農村における工業化のプロセスを具体的に分析した価値ある事例研究である。

しかしながら、本書に問題点も多い。第1に、『緑の工業化』というタイトルが意味不明なことである。文字通りに解釈すれば、「農業が発展して工業化につながった」ということになると思うが、著者の主張は「農村社会に埋め込まれた工業化」（p. 248）であるという。この説明はあいまいであり、本書の魅力を大きく損なっている。第2に、「農村」が重要な分析対象であるとすれば、農業の発展についても分析すべきだがそれが無い。そのため、ますます『緑の工業化』の意味がつかみにくい。例えば、台湾における蓬莱米の開発と普及がどれほど糶摺・精米業や他の農村工業の発展につながったかの分析すら無い。また、日本では第一次大戦

期に稲作の生産性が停滞し、米騒動を引き起こし、それを契機に日本が台湾での稲作の振興を図ったというのが一般的な理解だが、それへの言及もない。第3に、巨大な表を用いた分析が多いが、一般の読者には理解不能である。こうした表を用いているということは、明瞭な分析ができていない証拠である。分かりやすい図やコンパクトな表を用いて、重要なポイントをもっとわかりやすく説明すべきである。必要とあれば、細かい図表は付論か、紀要等で示すべきである。第4に、最も重要な点であるが、英文の文献がほとんど引用されておらず、国際性に欠ける。農村工業化や台湾の工業化については、英文の研究の蓄積があるはずである。それをレビューしていないことは大きな問題である。また台湾を分析対象にしなが、著者が、多くの台湾人にわからない日本語でもっぱら論文を発表していることも理解できない。最後に、農村工業化と台湾経済全般のその後の工業化との関連を議論して欲しかったと思う。しかしこれは、無い物ねだりに等しく、今後の研究課題となるものかもしれない。

評者が多くの批判をするのは、本書の研究の水準が国際レベルに近いからである。筆者の理解では、「アジア経済研究所発展途上国研究奨励賞」の狙いは、国際的に通用する研究を奨励することである。特に、第5章と第6章の内容はそのレベルに達している。国際的な学術雑誌に論文を発表することは、決して生易しいことではないが、今後、著者が国際的な活躍をすることを願ってやまない。

（アジア経済研究所上席主任調査研究員）

●受賞のことば——堀内^{ほりうち} 義隆^{よしたか}

このたびは、アジア経済研究所発展途上国研究奨励賞という伝統ある賞を賜り、大変光栄に存じます。選考委員ならびに関係者の皆さまに厚く御礼申し上げます。また、出版にあたりご尽力いただいた名古屋大学出版会の方々にも改めて御礼申し上げます。

本書では、農業植民地であるといわれてきた日本統治期の台湾社会において、植民地的状況への現地人による主体的な対応の結果として工業化の動きがあったことを歴史的に考察しました。

私が考える本書の新しさは、以下の三点です。

第一は、工業化を担う主体として、規模の小さな経営主体に注目し、台湾の工業化社会の形成過程の特徴を「小経営的工業化」として描き出したことです。通常は、工業化が進めば経営主体の規模は拡大してくと考えられますが、日本統治期の台湾では、そのような意味での大工業は、製糖業など一部の産業で成立しただけでした。しかし、当時の資料を見ていくと、家内工業の形態で輸出用の帽子を編んだり、収穫した米を粳摺・精米する零細規模の経営が大量に存在しています。台湾の工業化の特徴は、実はこうした中小零細規模の主体の方に強く現れていると考えました。

第二は、「農業社会のなかの工業化」という視点によって当該期の台湾の工業化を捉えたことです。一般的に農業社会であったとされる日本統治期の台湾において、工業化という経済発展のプロセスが始動していたことを理解するうえで、キーとなるのが農家経営のあり方です。宗主国日本は台湾を食糧供給基地と位置づけ、台湾の農家もそれに応えて米やサトウキビを増産しましたが、それと同時に農家が工業労働力の供給者でもありえたということ、そして、農産品加工を中心とする農村工業が発達したことが台湾に独特の工業化パターンを生み出したということを示しました。

第三は、工業化社会の成立という視角から台湾社会の変容・近代化を見たことです。台湾が新興工業国として台頭してくるよりも前、植民地時代の1920年代から戦時期・戦後の解放を経て1960年代に至る時期を工業化社会の形成期として把握しました。特に、1920年代以降の島内市場の発展をいわゆる植民地的モノカルチャー構造を脱する契機であるとししました。なかでも、機械の普及に伴う関連市場の発展は重要です。こうした島内市場の発展は、現地の中小零細規模の経営主体が新たに生じたビジネスチャンスに参入してくることで生じた変化だといえます。

植民地的状況におかれた社会における工業化あるいは経済発展には相応の限界もあります。本書でも「植民地工業化」という概念を使うことで、台湾の工業化の従属的な側面を随所で指摘しました。現在の台湾は既に発展途上国ではありませんが、ほとんどの発展途上国にはかつて植民地であった過去があり、過去の植民地時代の研究も、極めて現代的な意味を持つと考えています。

略歴

1973年 京都府生まれ。

2008年 京都大学大学院経済学研究科より博士（経済学）取得。

2009年 三重大学人文学部准教授。

主要著作

Industrialization and the Rice-Processing Industry in Taiwan Under Japanese Rule, 1895-1945, Minoru Sawai (ed.), *Economic Activities Under the Japanese Colonial Empire*, Springer Japan, 2016.

「台湾の高度経済成長と資本財供給」堀和生編著『東アジア高度成長の歴史的起源』京都大学学術出版会、2016年。